

## ハッキリしていた物のけじめ

小林 宏治

昭和五十五年五月、故大平首相がメキシコを訪問された時、私もたまたまメキシコを訪ねていた。私の会社は、前からメキシコのクエルナバカ市に通信機の製造工場をもっているので、年に一回くらい訪墨することになっている。新聞報道により故大平首相は、今回米国を経てメキシコ、カナダを訪問されると聞いていたので、森田秘書官を通じて当社のメキシコにおける活動状況を報告しておいたのである。これは特別な意味はなく、この頃はよく二国間貿易のことが話題になるので、念のためと申ってやったのである。

故大平首相は大変お元気だという現地の話で喜んでいたのであるが、ユーゴのチトー大統領の訃報で急遽ユーゴに飛びさらには西独にも立ち寄るとの噂を耳にして、少しく激務ではないかと心配していた。われわれ実務家でもこのような旅行は努めて避けるようにしているのに、いやしくも一国の首相にしては少しく程度を超えはないかと現地の幹部とも話していたのである。残念ながら、このことが事実となり、ご帰国後病床につかれたことを知って、「やっぱり」という感じてであった。その後新聞報道でご病状を知り一喜一憂の末、遂に訃報が発表され、全く愕然として、わが国はこの重大な時期に最も大切な指導者を失ったと悲嘆にくれたのである。

故人と私との接触は末広会を通じてである。末広会では故人がご出席の時は、その時々に応じての政治問題、経済情勢に関し、時にはご意見をも含めて解説をされるのが慣わしで、私どもにとっては大変勉強になったのである。慎重に一つ一つ言葉を選びながら、いやしくも事を疎かにしない態度でお話をされることに対し、優れた

政治家としての風格を印象づけられ尊敬の念を抱いていたのである。そのお話の後、夕食をとにもするのであるが、かりそめにも思い付きで話をするといった態度は酒席においても見られなかった。しかしリラックスしておられるとき、ふつと顔面筋肉がゆるんだ時は、全く心からの善人という印象であった。私もまれに自分の抱えている問題について説明申し上げたこともあるが、短い時間のなかでもじつと傾聴していただいたことは、信頼感に溢れるものであった。

故人は物のけじめのハッキリしたお人柄とお見受けしたことが何回かあった。七年前火災に遭われた時、さぞご不自由だろうとささやかな自社製家電製品をお見舞に差し上げたが、後に聞いた話であるが、このような物は受け取れないのでお返ししたいと思つたが、折角の好意でもあるし、小林君はよく知っているので頂戴することにしたとお話しされていたことを知って、かえって大変ご迷惑をおかけしたと思つた次第でした。

故人がまれにみる読書家であったことは、皆知っていることであるが、ご自身が接触する人々に対し、ご自身に対して極めて厳しい態度をもつておられたと聞いている。即ち、ご自身の接する人に対するアイデンティティをハッキリと持つことが大切だと主張され、そのために会う人々の名前を記憶することに人一倍の努力をしておられたことを聞いて、ますます尊敬の念をもつたのである。そのため来客の名前を聞くとき膝の上でその名前を指先で書いて頭に刻みつけられる工夫をしておられたと聞いて、故人の努力家という世評の裏付けに加えて、私自身の反省にもなつたということである。

私は一度首相官邸の外人客を含む招宴で英語のスピーチを聞いたことがあるが、失礼ないい方ながら、非常にうまかつたという印象であった。後で聞いたところによると、このために予習をされたという噂もあり、その努力に感じ入つた次第である。